

■ 平原1号墓出土の重層ガラス連珠

福岡県糸島市にある平原1号墓から特殊な重層ガラス連珠が886点出土しています。今回、これらのガラス連珠について材質調査を実施した結果、ナトロンと呼ばれる蒸発塩を原料としたソーダガラスで、アンチモンという成分を含むことがわかりました。このような化学組成のガラスは地中海世界で生産されたガラス（ローマガラス）の特徴です。

これらの重層ガラス連珠のうち、1点については過去にも分析報告がなされていましたが、製作技法および化学組成のいずれにおいても日本列島や近隣諸国に類例がなく、起源や流入経路も不明でした。しかし近年、筆者らによる海外調査において、形態的特徴の類似する重層ガラス玉が存在することがあきらかとなりました。一つはモンゴルで、匈奴の墓（ナイマートルゴイ遺跡）から出土しています。もう一例は、文化庁による奈文研とカザフスタン国立博物館の拠点交流事業のなかで、カザフスタン南東部の埋葬遺跡（カルカラ遺跡）から出土していることを確認しました。

そこで、平原1号墓出土品について改めて可搬型の蛍光X線分析装置を用いて非破壊材質調査を実施し、これらの海外資料との比較をおこないました。その結果、類似の化学組成をもつことが確認されたのです。

一連の調査研究により、平原1号墓の重層ガラス連珠は、当時ガラスの一大生産地であった東地中海沿岸地域で生産されたものが、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易路のなかでも北側の「草原の道」をつて運ばれた可能性が示されました。

（都城発掘調査部 田村 朋美）



平原1号墓出土重層ガラス連珠（上）
カザフスタン（下左）とモンゴル（下右）の類例

■ 油長酒造（株）と協定書を締結

「風の森」等の銘柄で全国的に知られ、奈良県御所市に所在する油長酒造株式会社と奈文研は、2021年8月に文化財保護と普及啓発に関する協定書を締結しました。これは、奈文研が有する、古代の酒造に関連した様々なコンテンツを生かしつつ、油長酒造が現代の醸造家の視点での酒造りをおこなう等の共同事業を軸に、酒造をキーワードとして、文化財に関する知識や関心の普及啓発を促進しようとするものです。

この協定書の締結を記念し、2021年11月11日には、平城宮跡資料館において研究集会「日本酒と日本料理の過去・現在・未来を考える」を開催しました。菊乃井の堀知佐子氏による「日本料理と日本酒の関係：「サケ」とは神様の食事」、油長酒造の山本長兵衛氏による「風の森を醸す：日本酒の歴史と油長酒造の歩み」、チーズプロフェッショナル協会の坂上あき氏による「未来の食文化をつくるパートナーとしてのチーズ：日本料理への受容・日本酒とのペアリング」、龍谷大学の田邊公一氏による「清酒酵母の歴史を考える」、東京医療保健大学の三舟隆之氏による「古代の食と日本酒」、新潟大学の畠有紀氏による「江戸の物語の中の食と酒：飲食物の擬人化表現をめぐって」、陶芸家の末廣学氏による「食卓を彩る器と酒器」等の講演や、「酒」の文字の墨書きをもつ土器などの出土遺物と酒器を中心とする陶芸作品の展覧がおこなわれ、多分野の専門家の間で活発な意見が交わされました。

今後、奈文研と油長酒造のパートナーシップのもとで、様々な新しい企画を展開していく予定です。ご期待下さい。

（企画調整部 庄田 慎矢）



研究集会の様子